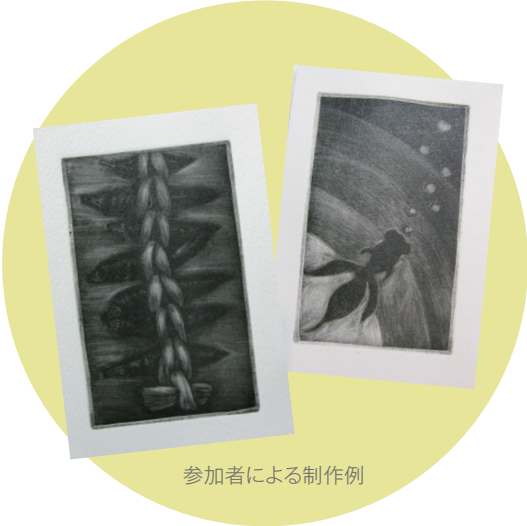
モノクロームメゾチント体験教室

ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクションでは、
モノクロームメゾチント技法を体験できる教室を
不定期で年に4～5回開催しています。
1回の実習で製版から刷りまでを行ない、
ポストカードサイズの作品を完成させます。
初めての方でも無理なく参加いただける、
初心者向けの教室です。



参加者による制作例

次回開催日と、申込方法

2014年秋の企画展「星より遠い色」会期中は
4回開催します。（教室の内容はすべて同じです。）

浜口陽三と国際メゾチント展
TIME OF THE MEZZOTINT
星より遠い色
COLORS BEYOND THE STARS

講師：江本創（アーティスト）

日時：①11月3日（月・祝）14：00～17：00　②11月4日（火）14：00～17：00
③11月24日（月・祝）14：00～17：00　④11月25日（火）14：00～17：00

※②④は、休館日の開催となりますが、展覧会をご覧いただけます。

参加費：≪初心者コース≫　入館料＋1800円（材料費込み）
≪経験者コース　※当館のメゾチント教室に参加された事がある方≫
入館料＋500円（メゾチントプレート代別途1000円）

定員：各回18名

持ち物：下絵(サイズ12×7.5cm)、汚れても良い服装、またはエプロン

10月15日（水）11：00から電話にて受付開始。（初めての方優先、定員になり次第終了）
ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション　TEL：03-3665-0251

◆経験者コースについて（旧・自由教室）
当館のメゾチント教室に参加された事がある方で、以前制作した版を手直ししたい、新しい作品に挑戦したい、
といった方の為に、経験者枠を設けました。（各回数名）
申込時に経験者コース希望の旨をお伝えください。※技法はモノクロームメゾチントに限ります。

メゾチント体験教室Q&A

Q1. メゾチントってどんな技法？

A1. 銅版画の技法のひとつ。
ビロードのような画面が特徴です。

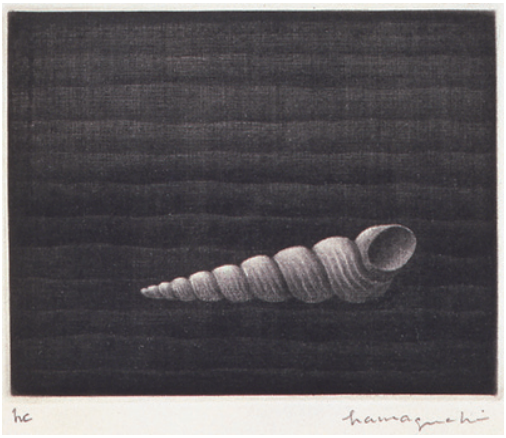
銅の板に施した凹部分にインクをつめ、凸部分の余分なインクはふき取って強い圧力で紙に刷るのが主な銅版画のしくみです。メゾチント技法では、最初に版全面に細かな傷（まくれ）をつけ、ビロードのような黒い画面をつくります。これを「目立て」といいます。（当館の体験教室ではあらかじめ目立て加工のしてある銅版を使用します。）明るく（白く）したい所は「スクレーパー」という道具でまくれを削りとり、インクが溜まる量を減らします。ぎざぎざのまくれがなだらかになるほど明るく（白く）なり、微妙な削り加減で美しいグラデーションの表現が可能です。えんぴつで黒くぬりつぶした画面に消しゴムで絵を描くようなイメージです。

下絵サイズ：12×7.5cm（縦横どちらでも可）

Q2. どんな下絵を用意したらいいの？

A2. 浜口陽三の作品を参考に見てみましょう。

左上：「猫」1937年
ドライポイント技法による作品。（今回の教室ではこの技法は使いません）
銅の板に先のとがった針のような道具で引っ掻き、その傷にインクを詰めてから余分なインクをふき取り、紙に刷りあげます。引っかいた所が黒くなるので、「線」で描くのに向いた技法です。



左下：「巻貝」1959年
メゾチント技法による作品。（今回の教室で使う技法です）
暗い背景のから白い巻貝が浮かびあがります。
よくみると、線ではなく、黒の「濃淡」で描かれています。
貝のまるみを帯びた形、影、背景のグラデーションは、メゾチントの得意とする表現です。どちらかというと「線」で描く表現には向きません。